組織行動研究

No. 7

編集後記にかえて

●本モノグラフは，基本的に第6号モノグラフと同一内容である。第6号の「編集後記にかえて」で，わたしは，「本モノグラフ（第6号）は，大学を卒業して企業に職を得た成人男子が，当該組織で三年目を迎えるまでのドキュメンタリー・フィルムと考えていただけばよいかと思う」と述べた。第6号モノグラフが，〝ラッシュ〟に近い段階でのフィルムとするならば，この第7号モノグラフは，さらに編集をすすめた段階でのフィルムといってよいだろう。

●この第7号モノグラフの英文論文は，もともと〝国際マーケット〟に出すことを意図して執筆された。すなわち，*International Journal of Intercultural Relations* という専門雑誌に応募した論文（第1稿）をそっくり活字にしたのが本モノグラフである。わたしたちの応募したこの論文は，一部の手直しが要求されたが，結果的にアクセプトされたので，本第7号モノグラフは，上記雑誌に掲載予定論文のプレプリントというかたちになっている。

●ところで，わが国の学問研究の世界は，極端な〝輸入過多〟の状況である。この状況の良し悪しは一概に断じられないとしても，気になることはおおくある。たとえば，わが国の社会あるいは人間システムの作動メカニズムは，欧米のそれと根本的にことなっているとする〝暗黙の立場〟があり，その一方で，外国産の理論や仮説をわが国の社会あるいは人間の諸現象にあてはめ検証・追試しようとする〝科学的営為〟がある一。なんとなく奇妙でチグハグなことではなかろうか。わが国の社会・人間システムの構造や機能が，欧米のそれらとことなるというかぎり，どこがどういうぐあいにことなっているのか，これを外国人にも〝ワカル〟ようなかたちで提示していかねばなるまい。〝日本的経営〟とか〝集団主義〟とかの説明では，もはや〝事足りない〟状況が充満しているのではなかろうか。

●わたしたちが，自分たちの研究の結果を，できれば英文にまとめ〝国際マーケット〟に出そうと心がけるのは，以上のごとき気持の悪いチグハグな状況から自らを脱却させたいと願うからにほかならない。だが，この作業は実に重労働である。そして，ときに，この重労働は〝張り切ってますナ〟式のフィードバックだけを受けたりもするので，精神衛生上も決してよくはない。こういう仕事は，〝張り切って〟いるから出来あがってくるものではない。ある種の〝意地〟と〝やせがまん〟がさせてしまうものなのである。わたしたちは，同胞日本人のなかに，〝意地とやせがまん〟の人種がもうすこし増えて欲しい気持切である。

（南　隆男）

慶應義塾大学産業研究所社会心理学研究班モノグラフ
組織行動研究（第7号）
編集　佐野勝男・南　隆男

KEIO STUDIES ON ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND HUMAN PERFORMANCE No. 7
MARCH 1980

発行　〒108 東京都港区三田2—15—45
慶應義塾大学産業研究所
電話（453）—5640（直通）
＜昭和55年3月29日＞

印刷　〒104 東京都中央区八丁堀3—21—4
株式会社国際印刷
電話（551）—3930（代表）
＜昭和55年3月22日＞